

上書きされる現実

—— 2002 年から 2011 年における腐女子キャラクターの変遷を事例として ——

相田 美穂

Overwriting Reality: Changing Fujoshi ("Rotten Girls") characters in Japanese Manga, 2002-2011

Aida MIHO

Fujoshi are women with enthusiastic interest in genres of fiction known as yaoi and BL ("boys love"), which express male-male romantic and sexual relationships. Fujoshi are thus a kind of devoted fan, or "otaku." This paper examines, through the perspective of gender, how representations of fujoshi have changed over the past few years, incorporating perspectives from the work of the Japanese academic and social critic Azuma Hiroki, in particular his concept of "moe" character-based consumption. Azuma makes a distinction between sexual desire situated in the genitals and "sexuality" as subjectivity. Male otaku respond to moe characters, or images in manga, animation, and in the mode of Azuma's sexual desire, while their consumption practice is what Azuma calls "database consumption," typified by "moe" characters, images with features that elicit a "moe" response of desire. Representations of fujoshi have been among consumer products constructed for male otaku.

I aim to demonstrate that fujoshi, who are both readers and writers of fujoshi manga, work to undermine, through the fujoshi image, the gender relations in which they themselves are involved. In other words, through the fictions that they create, fujoshi protest male-oriented fictions. Through this, they also resist male otaku desires that would keep them confined within two-dimensional fantasy worlds.

- | | |
|---------------------------------------|--|
| I. はじめに | (2) おたく男性の欲望の対象としての「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクター |
| II. おたく男性によるキャラクターの消費 | (3) おたく男性の欲望の対象としての「腐女子」キャラクター |
| III. 男性同士の恋愛を愛好する女性が描かれた漫画作品の変遷 | (4) 腐女子ブーム |
| 1. 考察の対象と基準 | (5) 腐女子キャラクターの多様化 |
| 2. キャラクター像の変化 | 3. 消費される腐女子キャラクター |
| (1) 男性の欲望の対象としての「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクター | IV. むすびにかえて |

I. はじめに

本稿の目的は、漫画に描かれた女性キャラクターと、それを消費するおたく男性との間に非対称性が構成される仕組みを明らかにすることを通じて、ジェンダー間の非対称性は、固定されておらず、揺らぐものであることを示すことである。

本稿が用いる事例は、漫画における男同士の恋愛を愛好する女性のキャラクターと、男性キャラクターの関係性の描かれ方である。この事例を選択した理由は、男同士の恋愛を愛好する女性のキャラ

クターは、男性キャラクターと良好な関係性を築くものとして描かれており、とりわけ、腐女子という呼称が男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターに対して用いられて以降、おたく男性キャラクターとの間の良好な関係性を描いた作品が現れ、男性性の解放に引きつけた解釈を生んでいるからである。なお、おたく男性によるキャラクターの消費を考察するにあたっては、東浩紀による「データベース消費」の概念が有効であるので、これを用いる。

キーワード：漫画、腐女子、おたく、萌え、データベース消費

男性同士の恋愛を愛好する女性（以下、愛好者）を描いた漫画は、2000年代から単行本化されるようになり、2014年の現在も出版が続いている。それらの作品の中には、木尾士目『げんしけん』（講談社）のように、アニメ化をはじめとするメディアミックス化された作品もある。

愛好者向けの作品は、漫画や小説、ドラマCDやDVD、コンピュータゲームなどの形をとって流通している。作品の取り扱い、一般の書店の他に、おたくと結びつけられる媒体で行われている。取り扱い際には、一般の書店やネット書店・古書店では、分類名に「ボーイズラブ（BL）」を使用している。その他に、「やおい（ヤオイ、801）」「JUNE（じゅね）」「耽美」「少年愛」などが用いられてきた。

頒布の場合は、同人誌即売イベントや、専門店での委託、中古売買、作り手による通信販売がある。愛好者が描いたイラストや小説等は、インターネット上で無償・有償で公開されている。書店でもおたくに関連する分野でも、描かれている男性同士の恋愛の中には、男性キャラクター同士のセックス描写が含まれている場合もあり、インターネット上では、愛好者のみが閲覧できるように、パスワードでアクセスを制限しているウェブサイトもある。

本稿が考察の対象とするのは、作品や愛好者ではなく、漫画に描かれた愛好者である。

なぜならば、愛好者がアクセスする媒体は、おたくと結びつけられるものであるが、おたくとして愛好者を捉えようとした時、女性である愛好者たちとおたく男性との間には、非対称性が指摘できるからである。

非対称性は、ふたつの点で現れる。一つは、女性と男性との間で、彼女／彼らを示す言葉が登場するときの「時間差」である。もう一つは、本稿で論じようとしている通り、おたくに引きつけたときの、愛好者の女性とおたく男性の関係性に現れる。

一つ目の「時間差」について、女性が描き、読む作品として男性同士の恋愛が描かれ始めたのは、1970年代であるという（永久保 2003）。したがって、1970年代には、男性同士の恋愛を描いた作品を愛好する女性の読者を想定できるが、彼女たちが「腐女子」という固有の名称を持ち始めるのは2000年代に入ってからである。

「おたく」は、1983年に命名され（中森 1989）、1989年にマニアの意味で「幼女殺人事件で突然大

衆メディアに浮上した『おたく族』なる言葉」（別冊宝島編集部編 1989：3）として一般に注目され、普及した。固有の名称を持たない／持っているという非対称性が、およそ10年にわたって愛好者の女性とおたく男性の間には存在した。

二つ目の非対称性は、愛好者が「腐女子」という名称を伴っておたくとの関係において言及された時に現れる。

これまで、女性が愛好する男性同士の恋愛を描いた作品や、それを愛好する女性についての研究では、「男同士の恋愛」が描かれているという点に着目し、女性と男性の非対称性に触れている。評論では、小説家の榊原史保美は、セクシュアリティの観点から、自らがF t Mゲイ（女性であるが性自認が男性で、男性を指向する）であると分析し（榊原 1998）、中島梓（小説家の栗本薫の別名）は、女性が社会で与えられた位置に納得ができないため、やおいの美少年キャラクターに自らを仮託したのだと論じ（中島 1998）、野火ノビタ（漫画家の榎本ナリコ）は、男性キャラクター同士のカップルには、女性と男性の恋愛にあるようなジェンダーの差に影響されない「真実の愛」がある（野火 2003）とした。

これらの批評では、女性が男性同士の恋愛を愛好するのは、セクシュアリティの問題や、社会における女性と男性のジェンダー間の非対称性であるという論点が提出されている。

作品自体を対象とした研究では、男性同士の恋愛を描く作品の男性キャラクターに割り振られた役割である「受け（受）」「攻め（攻）」に注目し、ジェンダーやセクシュアリティの規範を批判的に捉えている。そうした研究は、男性キャラクター同士の関係性や、キャラクターの描かれ方における女性性と男性性が、キャラクター同士の性交時の役割における挿入される側と挿入する側に固定されているのではないことを描き出した。愛好者は、性交時に挿入される側を「受」、挿入する側を「攻」と呼んでいる（大崎 2009：16-17）。言い換えれば、挿入される側／挿入する側という区別は、女性と男性と重なるが、男性同士の恋愛を描いた作品では、女性性と男性性が受と攻に割り当てられているわけではない。この視点から、永久保陽子では、男性同士の恋愛を描いた作品は、男性キャラクター同士を用いた「ヘテロ的なテキスト」であり、女性の性的欲望に対する抑圧を示しているとし（永久保 2003）、堀あき

こは、まなざされる男性キャラクターという特徴と併せて、セクシュアリティの規範を攪乱するものとし（堀 2009）、守如子は、受動と能動のいずれも男性キャラクターの役割として描かれることに対して、「ジェンダー基準を揺るがす側面」を見て取っている（守 2010）。

つまり、女性性と男性性に注目して作品の男性キャラクターを解釈する論者では、男性キャラクターを通じて、女性の抑圧を見たり、ジェンダーの規範や基準を攪乱したり揺るがす側面を読み込んでりしている。

作品ではなく愛好者に注目する研究でも、「受／攻」という男性キャラクターに注目し、「受／攻」の「解釈」に基づいた女性のコミュニティや、ジェンダーの違いを超えるコミュニティの可能性を見出している。

金田淳子は、「マンガ同人誌」を生み出す場を、解釈コードを共有することで成立する「解釈共同体」とし、「受／攻」の解釈コードを共有する者のコミュニティが、女性だけでなく男性も含まれるものとして再編される可能性を指摘した（金田 2007）。東園子は、男性同士の恋愛を好む女性の「妄想」を「共同の行為」として捉え、愛好者たちのコミュニティでは、異性愛を排除した女性同士の「絆」を楽しんでいるという（東 2010）。これらは、女性同士（見方によっては男性も含む）の結びつきを愛好者に読み込んでいるものである。

男性の側からの議論では、男性同士の恋愛を描いた作品を男性が愛好することによって、男性性から解放されたり、愛好者の女性との関係が男性の抑圧の解除であると論じている。

BLの男性キャラクターを「男らしさ」の基準からみた吉本たいまつは、作中の男性キャラクターが現している「へたれ」、「かわいい」、「生活力がない」という特徴を、「男らしさ」の「オルタナティブ」と位置づけ、男性が作品を読むことは、「男らしさ」から男性を解放するのだという（吉本 2007）。

愛好者の女性に焦点をあてつつ、男性を論じたものでは、愛好者がオタクイメージに与えた影響に注目している（池田 2012）。愛好者は、腐女子と自称したり、呼ばれたりすることがある。言葉が示す意味は一定しないものではあるが、愛好者が使用する用語をまとめた『腐女子のこぼれ』では、「腐女子とは「男同士の恋愛を愛好する女性」という意味」

（大崎 2009：8）と定義されており、池田もその意味で使用している。池田によれば腐女子への注目は、「二〇〇〇年代中頃」に集まるようになった。

『電車男』の例でもわかるように、オタクといえば暗に男性のオタクを指していた。こうしたオタクイメージにおけるジェンダーの偏りが緩和されたのは、二〇〇〇年代中頃に「腐女子」が注目されるようになって以降だと考えられる。（池田 2012：141）

「腐女子」が注目されるようになって以降、「オタクといえば暗に男性のオタク」という「オタクイメージにおけるジェンダーの偏り」が「緩和」されたといい、「腐女子」を「オタクイメージ」へ関連つけている。池田が「腐女子」を「暗に男性のオタク」を意味していた「オタク」へと引き込めた理由は、「オタクイメージ」を、「オタク的行動様式」と結びつけているからである。

「腐女子」への注目によって、暗に存在した「オタク＝男性」という図式は相対化されることになった。このことは重要である。オタク論は長い間、男性オタク論だった。そこには女性オタクは入っていないか、男性を語ることによって包摂されているかのようなイメージだった。しかし、「腐女子への注目」によって、オタク的行動様式＝男性オタクの行動様式という図式が相対化されるのである。（池田 2012：142）

池田には「腐女子」が「オタク的行動様式」をもつという前提がある。「オタク的行動様式」は、池田が女性向けファッション雑誌『小悪魔 ageha』のモデルが漫画好きを公言する誌面を取り上げていることから、漫画好きや、同人誌即売イベントであるコミケに行くという行為を指しているとわかる。「オタク的行動様式」をもつ「腐女子」やギャル雑誌の女性モデルを引き合いに、「オタク的行動様式」は「男性オタクの行動様式」ではないではないと結論づける。池田は、「腐女子」と「オタク的行動様式」および「オタクイメージ」を結びつけることで、「腐女子」をオタクに引き寄せた。「オタク＝男性」という図式は相対化されることになった」という通り、池田は「腐女子」に言及しながら、オタク男性に注目する議論を展開している。

伊藤剛は、おたく男性が語り手である漫画『とな

りの 801 ちゃん』(後述)を例に、漫画に描かれたおたく男性と男同士の恋愛を愛好する女性の関係から、男性の抑圧の解除を論じている。

当然のことながらそれは、このマンガ作品が男性の手によるためであり、逆にいえば「腐女子」をパートナーにした男性から何が強調されて見えるのかということを示している。(略)それは、とすれば「男性であること」による恩恵は享受しつつ、パートナーとの個人的関係において「男性性」を放棄するという都合の良さとして批判されるだろう。その批判は甘んじて受けよう。しかし、それでもやはり、ここに「男らしさ」という抑圧の解除を見ることは許されると思う。(伊藤 2007: 91)

「「腐女子」をパートナーにした男性」は、「パートナーとの個人的関係において「男性性」を放棄する」のだといい、「ここに「男らしさ」という抑圧の解除」を見ている。伊藤は特に漫画に描かれた「腐女子」とおたく男性のパートナー関係に「「男らしさ」という抑圧の解除」を見る。こうした「腐女子」キャラクターの解釈を、伊藤自ら「都合の良さ」と位置づけている。

腐女子という言葉が登場することで、男性同士の恋愛を愛好する女性は、研究においては「オタクイメージ」と結びつけられ、漫画においては、おたく男性のパートナーとして描かれるようになった。

こうした研究と、本稿の違いは次のようなものである。作品や愛好者のコミュニティに焦点を当てる研究では、作品に描かれた男性キャラクターに見られる女性性や男性性に言及することで、ジェンダーやセクシュアリティの規範を読み解いたり、女性同士やジェンダーを超える結びつきを示したりしているが、キャラクターにも見られるような女性と男性の間の非対称性がどのように構成されているのかや、女性やジェンダーを超えたコミュニティを想定しなければならないような、男性のコミュニティとの非対称性については、注目していない。

男性による「腐女子」以降の議論では、「腐女子」を、男性がおかれている「オタクイメージ」のジェンダーの偏りを緩和したり、「男らしさ」による男性の抑圧の解除として位置づけているのだが、位置づけられた腐女子と男性の関係性が、ジェンダーの非対称を構成していることについては、言及しないか、または批判的ではない。

腐女子とおたくを結びつけることで、女性と男性の非対称性があらわになるというのは、それが、固定的な二項対立のように見えながら、実は不安定なものだからである。前述の池田は、おたく男性に対するおたく女性としての腐女子を規定していた。

しかし、必ずしも、腐女子はおたくに位置づけられているわけではない。コミュニケーションからおたくを論じた中島梓は、女性のおタクというものがあるかは分からないとし(中島 2001)、腐女子の用語を整理した辞書形式の著作をもつ大崎祐実は、「女オタクと腐女子という二つの集団は重なる部分もあるが完全に一致するわけではない」(大崎 2009: 9)として、おたくではない腐女子を想定している。つまり、おたくをめぐる腐女子とおたく男性の二項対立として現れているものは、固定されたものではなく、不安定なものである。

スコットは、「肯定的な定義とはつねに、その対立物とされるものの否定もしくは抑圧のうえに成立する」(Scott 1990 = 2004: 34)とし、「意味をめぐる抗争」が、「二分された対のように見えているものの地位の自然さに挑戦」すると述べている(Scott 1990 = 2004: 35)。

固定化された対立は、どちらのカテゴリーについてもその異種混淆性を、対立するものとして提示されている用語がどれほど相互に依存し合っているかを——すなわち、それがなんらかの固有の、もしくは純粋な対立からではなく、内部的に設定された対照から意味を引き出していることを、覆い隠してしまう。そのうえ、この相互依存性は通常ヒエラルヒーをなしており、一方の用語が優勢で主要で可視的であるのに対し、もう一方は従属的で二次的であり、しばしば存在しないか不可視である。(略)意味をめぐる抗争は、新しい対立の導入やヒエラルヒーの逆転、抑圧された用語を明るみに出し、二分された対のように見えているものの地位の自然さに挑戦し、それらの相互依存性とそれぞれの内部の不安定性を明らかにしようという試みを伴う。(Scott 1990 = 2004: 35)

「二分された対のように見えているものの地位の自然さに挑戦」するというスコットの視点は、愛好者の女性とおたく男性の非対称性という本稿の問題意識と一致する。本稿の課題とは、腐女子がおたく男性と結びつけられたときに生じる「意味をめぐる抗争」である。とりわけ、漫画作品におたく男性の

パートナーとして描かれた腐女子キャラクターは、腐女子とおたく男性の「意味をめぐる抗争」を読み解くのに適切な対象である。伊藤の記述に現れるように、漫画のキャラクターは、読者の現実に引きつけて解釈されるものだからである。

本稿は、以下の構成をとる。Ⅰでは、考察の対象と視点を先行研究を参照しながら明らかにする。続いて、Ⅱでは、漫画に描かれた腐女子と、おたく男性の関わりを、おたく男性による腐女子キャラクターの消費として捉える視点から、「データベース消費」に言及する。Ⅲでは、漫画に描かれた男性同士の恋愛を好む女性キャラクターと、作中の男性キャラクターの関係性を、漫画を事例に整理する。Ⅳでは、Ⅲでの整理から、漫画に描かれた腐女子キャラクターが、どのような意味でおたく男性による消費の対象となっているのかを、ジェンダー間の非対称性を構成する仕組みとして明らかにする。本稿は、おたくをめぐる女性と男性のジェンダー間の非対称性が構成される仕組みを読み解く試みである。

Ⅱ. おたく男性によるキャラクターの消費

本稿では漫画に描かれるキャラクターと、おたく男性との関係を捉えるために、消費という概念を用いる。本稿での消費は、東浩紀が「データベース消費」を論じる際に、大塚英志の提示した「物語消費」との違いに言及したのと同じ意味である。

「物語消費」では、ビックリマンチョココレートを事例に、消費者が消費しているのは商品を集めることでアクセスできる「大きな物語」であり、チョコレートやシールなどの商品は、見せかけに消費されていることを明らかにした。おたくが消費するキャラクターを事例にポストモダン社会では、消費されるのは「物語」ではなく、「データベース」だとしたのが東である。

本稿が、大塚や東が使用している意味で、消費の概念を用いるのは、漫画に描かれたキャラクターの消費では、消費者は直接的には、漫画の単行本を消費しているのだが、それは見せかけに消費されているものだからだ。キャラクターの消費者が真に消費しているのは、大塚のいう「大きな物語」ではなく、漫画のキャラクターを構成する「データベース」である。東の概念は、本稿が漫画に描かれた愛好者、つまり漫画のキャラクターとしての愛好者を、おた

く男性が消費する仕組みという問題意識に一致する。東が事例としたのが、おたくによるキャラクターの消費だからである。

東は、おたくを通じてポストモダン社会を論じるために「データベース消費」を提示した。東によれば、おたくが好む「萌え」キャラクターでは、キャラクターのオリジナル性が消費されているのではない。「オタクたち」が消費しているのは、「萌え」の「データベース」である。

「萌え」が何をさすかを、東は「キャラ萌え」として説明している。

九〇年代のオタクたちは一般に、八〇年代に比べ、作品世界のデータそのものには固執するものの、それが伝えるメッセージや意味に対してきわめて無関心である。逆に九〇年代には、原作の物語とは無関係に、その断片であるイラストや設定だけが単独で消費され、その断片に向けて消費者が自分で勝手に感情移入を強めていく、という別のタイプの消費行動が台頭してきた。この新たな消費行動は、オタクたち自身によって「キャラ萌え（引用者注：原文では太字）」と呼ばれている。（東 2001：58）

東では、90年代では、オタクたちが消費するのは、原作の「物語」「メッセージ」「意味」ではなく、「その断片であるイラストや設定だけ」「単独」である。そして、「断片であるイラストや設定を単独で消費」するオタクたちは、消費の対象となっている「断片」に「自分で勝手に感情移入を強めていく」。この消費行動が「キャラ萌え」である。「キャラ萌え」は、「物語」「メッセージ」「意味」を欠いた「断片」である。

「萌え」の対象となる「断片」を、東は「萌え要素」と呼んでいる。「萌え要素」を説明するために、東は「デ・ジ・キャラット（でじこ）」を例に挙げ、でじこを構成する萌え要素として、「猫耳」「鈴」「しっぽ」「メイド服」「大きな手足」「緑色の髪」「触覚のようにふわふわした髪」を抽出している（東 2001：66）。でじこは、アニメや漫画のキャラクターや、オリジナルのキャラクターを配したグッズを企画・販売する「ゲーマーズ」と、「ブロッコリー」のキャラクターとして、おたくの間で人気を博したマスコットである。

こうした、「萌え要素」から構成されるキャラクターの特徴は、キャラクターを描く作家の個性とい

うよりは、「あらかじめ登録された要素が組み合わせられ、作品ごとのプログラム（販売戦略）に則って生成される一種の出力結果となっている」（東 2001：67）という。

だから、おたくが消費する「萌え」キャラクターは、常に更新され続ける「萌え要素」のデータベースから構成されている。キャラクターは、データベースに登録された「萌え要素」の引用と組み合わせによって構成されたものである。

おたくは、キャラクターとデータベースの二重の水準で消費を行っている。「萌え要素」の組み合わせとしてのキャラクターには、オリジナルやコピーの区別がない。おたくにみられる二重構造になった消費を、東は、「データベース消費」と名付けた（東 2001：78）。

また、東は、おたくの欲望について、性器的な欲求と主体的な「セクシュアリティ」は異なるとする。そのうえでおたくは、「倒錯的なイメージで性器を興奮させることに単に動物的に慣れてしまっている」（東 2001:130）という。さらに、性器を興奮させる「倒錯的なイメージ」が、「萌え要素」のデータベースを構成するデータのひとつひとつであることも東は暗示している。

データベース消費の視点からは、腐女子キャラクターは消費されるものである以上、萌え要素のデータベースを構成する要素の一つとなりうるものであるといえる。同時に、萌え要素となりうることはつまり、おたく男性にとって、性器を興奮させる要素の一つとなりうることである。

つまり、漫画での腐女子キャラクターが、腐女子とおたく男性の良好な恋愛関係を描いたという現象は、おたく的な消費からみると、腐女子キャラクターがおたく男性にとって性器的な興奮と結び付けられるものといえる。しかし、腐女子キャラクターの変化をみれば、腐女子キャラクターがおたく男性に性器的な興奮とともに消費されるだけではないことが指摘できる。

Ⅲ. 男性同士の恋愛の愛好者である女性が描かれた漫画作品の変遷

1. 考察の対象と基準

漫画作品において、「男性同士の恋愛を愛好する女性」が描かれた単行本の刊行が始まったのは、

2002 年である。すべての作品について、本稿で触れることは出来ないため、本稿で考察の対象としていく作品は、次の基準で選択した。

1) 時系列でみたときに、以前の作品とは異なる特徴が現れているということ。

これは、たとえば、最初に「男性同士の恋愛を扱った小説や漫画を好む女性たち」が描かれた作品であるとか、「男性同士の恋愛を扱った小説や漫画を好む女性たち」と、「おたく男性」の良好な関係性が描かれるようになった作品に当てはまる。

2) ヒット作となった作品であるということ。

「ヒット作」の基準は、メディアミックスをされていることによって判断する。本稿が対象とする腐女子を描く漫画では、単行本の発行部数を特定することが困難だからである。そこで、メディアミックスがあるものは「ヒット作」とみなす。

以上の二点を兼ね備えている作品を優先的に考察の対象とするが、いずれか一つを満たしている作品もまた、考察の対象とした。具体的な作品名を挙げると次の 8 作品となる。すなわち、『電脳やおい少女』、『げんしけん』、『となりの 801（やおい）ちゃん』、『はっぴー腐女子』、『らっきー腐女子』、『にこにこ腐女子』、『フダンシズム — 腐男子主義』、『くされ女子！ — 百合で腐女子なサチコとゆかいな仲間たち』である。ただし、『はっぴー腐女子』『らっきー腐女子』『にこにこ腐女子』は、特徴が共通するため、個別の考察ではなく 3 作品共通のものとして取り扱う。

考察に当たっては、次の観点を取る。

1) 中心的に描かれる「男性同士の恋愛を愛好する女性」のキャラクターは、「腐女子」という呼称を持つのか。

これは、I で触れた通り、「男同士の恋愛を愛好する女性」が、特定の名称・呼称を持っていなかった時期があるからである。作品のすべてで、腐女子の名称・呼称が用いられているわけではない。

2) 「男同士の恋愛を愛好する女性」のキャラクターが築く関係性と、相手となるキャラクターのジェンダーとの関連性。

これは、「男同士の恋愛を愛好する女性」が、2002年の登場時から、男性キャラクターの欲望の対象として描かれているからである。その変化を追いつ、変化を読み解くのが本稿の目的である。

3)「男同士の恋愛を愛好する女性」のキャラクターを欲望の対象とする男性キャラクターが、「おたく」男性として提示されているのかどうか。

これは、「おたく」男性の欲望の対象として描かれることが、おたく男性による腐女子キャラクターの消費と関わりをもつからである。

2. キャラクター像の変化

(1) 男性の欲望の対象としての「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクター

筆者が確認した限り、「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターを中心に描いた漫画作品で、もっとも早い時期に単行本化されたのは、『脳やおい少女』第1巻(2002年)である。漫画のあらましを確認すると、四コマ漫画の体裁をとるこの作品では、主人公は女性で、大学生である。「男同士の恋愛」に対する主人公の関わり方は、作中で主人公が自らを「やおい好き」だということに現れている。彼女は、一般の書店で「やおい」作品を購入し、インターネットのチャットを通じてファン同士の交流を楽しんでいる。主人公は、自分が「やおい好き」であることを、彼氏をはじめ、大学の学友である女性キャラクターに対しても隠そうとしている。

『脳やおい少女』における主人公をめぐるキャラクター同士の関係で、特に注目したいのは、主人公の「彼氏」が描かれていることである。彼氏の特徴は、大学生で、背が高くオシャレな男性キャラクターということである。彼氏キャラクターのモデルについて、漫画の作者は、二人組男性アイドルグループの「王子様」キャラクターであるアイドルだと述べている。

考察の基準に従って、『脳やおい少女』を整理すると、次のようなことがいえる。

1) 主人公に対して「腐女子」の呼称は用いられていない。主人公が「男同士の恋愛を好む女性」であるのは、彼女が「やおい好き」であることで示されている。

2) 主人公の「彼氏」が描かれている。「彼氏」は、

主人公が「やおい」好きであることを知らず、彼女を「ピュア」だと考えている。主人公が、彼氏よりも「やおい」のチャットやイベントを優先して予定を組み、彼氏の誘いに応じない場面が描かれるが、彼氏は、誘いに応じない理由を、主人公の「ピュア」さであると解釈して、主人公を「かわいい」と感じている。主人公が「やおい」好きであることを明かさないと、主人公と彼氏の良好な関係性は両立するものとして描かれている。

3) 彼氏は、おたく男性ではない。

「腐女子キャラクターとおたく男性キャラクターの良好な関係性」は、『脳やおい少女』では、描かれない。『脳やおい少女』の特徴は、主人公が「男同士の恋愛を愛好する女性」として描かれているが、腐女子という呼称は用いられておらず、また、彼女を欲望の対象とし、彼女と良好な関係性を築く男性キャラクターはおたくとしては描かれていない。

(2) おたく男性の欲望の対象としての「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクター

2002年には、『げんしけん』1巻が刊行された。これは、『月刊アフタヌーン』に掲載された作品で、スピノフアニメ作品を含むメディアミックスをされた「ヒット作」である。『げんしけん』で特筆すべき特徴は、主人公が男性で「おたく」であるということだ。描かれているのは、おたく大学生の恋愛を含めた大学生活である。

主人公は「おたく」であることをためらいながらも楽しみたいと考えている大学生である。彼が所属するサークル「現代視覚文化研究会(げんしけん)」は、彼の欲求を満たすもので、さまざまなタイプのおたく男性が所属している。女性キャラクターは、初期には、コスプレイヤーで帰国子女が一人だけである。彼女は、「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターで、1巻の終盤に登場する。4巻(2004年)では、BL漫画を描いている「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターが、主人公の後輩として新たに登場する。

「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターと、男性キャラクターの関係に注目すると、『脳やおい少女』と『げんしけん』では違いがある。後者では、おたく男性のキャラクターとの良好な関係が描かれている。その特徴は次のようなものだ。

1)「男性同士の恋愛を愛好する女性」キャラク

ターは、二人とも「腐女子」という呼称を持たない。

2) コスプレイヤーである女性キャラクターは、同じげんしけんに所属するコスプレ衣装を作製しているおたく男性キャラクターと恋愛関係にあることが、4巻で示唆され、関係は物語の終わりまで継続している。BL漫画を描くキャラクターは、物語の終盤で、主人公と恋愛関係を結ぶ。7巻(2005年)では、お互いに好意を持っている可能性が描かれ、8巻(2006年)では理解し合い、一旦の最終巻である9巻(2006年)では、恋人同士という関係性が確立していることが示される。

3) 彼氏となるキャラクターは、コスプレ衣装を製作するキャラクター・主人公共に、「おたく男性」として描かれている。

『げんしけん』は、おたく男性のキャラクターを主人公として、おたく男性が、欲望の対象としているBL漫画を描く女性キャラクターとの間に、良好な関係性を築くという物語である。

2004年頃には、「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターと、おたく男性キャラクターの関係として描かれているのは、女性キャラクターがおたく男性キャラクターの欲望の対象であり、女性キャラクターとおたく男性キャラクターの間には、良好な関係性が築かれているということだ。

(3) おたく男性の欲望の対象としての「腐女子」キャラクター

2006年に第一巻が刊行された『となりの801ちゃん』(以下、『801ちゃん』)では、物語の前提が、おたく男性である主人公キャラクターの彼女が、腐女子だということである。

『801ちゃん』は、ブログ上で発表された漫画を元に、四コマを中心として、二コマ、一コマの作品で構成される。

漫画は、主人公と彼女である801ちゃんの日常を描く。物語の冒頭では、主人公が自らを会社員でオタクだと紹介している。次いで、主人公は、自分には「801ちゃん」という彼女がいること、彼女は「腐女子」であることを述べる。

『801ちゃん』での腐女子キャラクターには、他の作品には見られない特徴がある。彼女の中にモンスターが隠れているということだ。801ちゃんは、「普通」はかわいい会社員の女性なのだが、背中には秘密のチャックがついている。チャックは、

彼女が、萌えの対象を見つけた時に開く。開いたチャックの中からは、毛むくじゃらで球体のモンスターが現れ、「かわいい女性」としての彼女の姿は、脱ぎ捨てられた着ぐるみ状になり地面に崩れ落ちる。モンスターは、「萌え! 萌え!」と叫びながら飛び跳ねたりする(図1)。「萌え」が収まると、モンスターは彼女の中に再び収納され、チャックは閉じられ、「かわいい女性」としての彼女の姿が復活する。

『801ちゃん』については、次のことがいえる。

1) 「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターは、「腐女子」という呼称・名称をもつ。2) 主人公キャラクターは男性で、「腐女子」キャラクターは、主人公の彼女として描かれている。3) 主人公は、おたく男性である。

『801ちゃん』は、おたく男性キャラクターの「彼女」として腐女子キャラクターを描いた。『801ちゃん』からは、「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターを腐女子とし、腐女子キャラクターを、おたく男性の「彼女」として描く漫画作品が、2006年頃に現れてきたことがわかる。



図1. 『となりの801ちゃん』第一巻4頁: 801ちゃんから飛び出した「モンスター」
©小島アジコ/株式会社宙出版

(4) 腐女子ブーム

『げんしけん』、『となりの801ちゃん』を経て、2007年、2008年に、「腐女子」キャラクターを、男性キャラクターの「彼女」として描く漫画の発行点数は増加した。一連の現象を代表する作品に、『はっぴー腐女子』（2007年）、『らっきー腐女子』（2008年）、『にこにこ腐女子』（2008年）のシリーズがある。いずれも、複数の描き手の作品から成る書き下ろしの単行本で、収録されている漫画には、四コマもあればいわゆるストーリー漫画風のものもある。ただし、これらに掲載された漫画に登場する腐女子キャラクターのすべてが、おたく男性の彼女として描かれているわけではない。

『はっぴー腐女子』の巻頭に収録されている漫画作品の「SUPER STRONG GIRL!」では、会社員男性を主人公として、彼の上司かつ、「彼女」でもある腐女子キャラクターと主人公キャラクターの関係を描いている。主人公の男性キャラクターは、おたく男性ではなく、腐女子である彼女とは「普通の恋愛ができない」といいながらも、「でも好き」と語っている（図2）。『らっきー腐女子』には、主人公を腐女子キャラクターとして、彼女の年下の彼氏である男性キャラクターとの関係を描いた四コマ漫画「彼氏彼女の事情」が収録されている。彼氏キャラクターは、おたく男性ではないが、腐女子である主人公に「男同士の恋愛」を描いた本を見せられ、同様の本を買うためにイベントに行きたがるようになる（図3）。『にこにこ腐女子』収録の四コマ漫画「みくんとせっちゃんの場合カコバナ」では、過去に腐女子だったという女性キャラクターを主人公として、男性キャラクターとの掛け合いで、主人公が「男同士の恋愛」を漫画に描くようになったいきさつと、描かなくなった現在、腐女子や「男同士の恋愛」について考えていることを描いている（図4）。この作品は、『はっぴー腐女子』、『らっきー腐女子』に掲載された作品の続編として描かれているため、過去の作品を踏まえると、主人公と男性キャラクターは、彼女と彼氏の関係であり、男性はおたくであることが分かる。



図2. 楠見らんま「SUPER STRONG GIRL!」
（『はっぴー腐女子』16頁）ホビージャパン

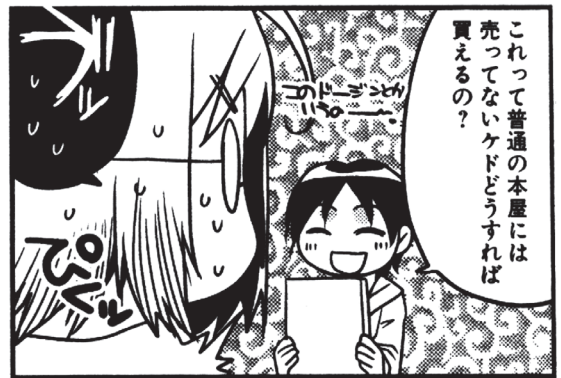


図3. 刻田門大「彼氏彼女の事情」
（『らっきー腐女子』21頁）ホビージャパン



図4. 戦国結城「みくんとせっちゃんの場合カコバナ」
（『にこにこ腐女子』58頁）ホビージャパン

ここで言えるのは、1)「男性同士の恋愛を愛好する女性」が、「腐女子」という名称で描かれているということ、2) 男性キャラクターの欲望の対象として腐女子キャラクターが描かれるということ、

3) 腐女子キャラクターを欲望の対象とする男性キャラクターは、おたくでない場合もあるが、おたくとしても描かれているということの三つである。

2006年から2008年にかけて、『801ちゃん』『はっぴー腐女子』『らっきー腐女子』『にこにこ腐女子』では、「男同士の恋愛を愛好する女性」キャラクターは「腐女子」として、おたくを含む男性キャラクターの欲望の対象かつ、良好な関係を築くものとして描かれるようになった。

(5) 腐女子キャラクターの多様化

漫画に描かれる腐女子キャラクターは、2008年以降、多様化していく。男性キャラクターの「彼女」としての腐女子キャラクターは、異性愛主義の女性として現れるが、男同士の恋愛を愛好する男性のキャラクター、腐女子でレズビアンキャラクター、男性同士の妄想の中身を中心に描くエッセイ漫画の語り手としても描かれるようになった。

男同士の恋愛を愛好する男性のキャラクターは、『フダンシズム——腐男子主義』に登場する。愛好者の男性は、腐女子に対して「腐男子」と呼ばれる。主人公は、男同士の恋愛を愛好する男子中学生キャラクターである。主人公は、愛好者の男性として、他の腐女子やおたく男性と交流するときには、ロリータの衣装を着用し、「腐女子」と呼ばれている。主人公は、男性であり、「腐女子」であるキャラクターである。『フダンシズム』では、1) 主人公は腐女子という呼称されるキャラクターである。2) 主人公と男性キャラクターの関係は、「腐女子」としては欲望の対象として描かれるが、主人公は他の腐女子キャラクターに恋愛感情を抱いている。3) 「腐女子」を欲望の対象とする男性キャラクターはおたく男性である。おたく男性キャラクターの「腐女子」に対する恋愛感情は成就しないし、主人公は、「腐女子」だが、おたく男性としては描かれていない。

『妄想乙女通信』シリーズ(『妄想乙女通信』『妄想乙女通信R』『妄想乙女通信G』の三作)は、作中の腐女子キャラクターが構成する「男性同士の恋愛」の内容をエッセイ風に描いた異なる作者による複数の漫画作品を収録している。描かれる内容は、腐女子キャラクターが、日常生活の中で目撃した男性同士が、どのように親密であるように見えたのか、それによってどのような興奮を喚起されたのかである。『妄想乙女通信』収録の作品では、1) 腐女子

という名称が登場する。2) 腐女子キャラクターと関係性をもつ男性キャラクターは登場しない。男性キャラクターは、腐女子キャラクターが構成する妄想の素材、または妄想の結果として描かれている。

レズビアンで腐女子であるキャラクターは、『くされ女子!——百合で腐女子なサチコとゆかいな仲間たち』に描かれる。主人公は「腐女子」で、レズビアンである。作中で描かれているのは、主人公を含む腐女子三人の交流であり、腐女子キャラクターとおたく男性を含む男性キャラクターとの良好な関係性は友人としてのみ描かれる。

『げんしけん』の直接の続編にあたる作品、『げんしけん: 二代目の壺』(2011年)では、主人公はおたく男性から腐女子に変わっている。新たなキャラクターとして、腐女子キャラクター二人と、女装した腐男子キャラクター一人が登場している。腐女子が漫画のキャラクターとして描かれるのは、もはや「普通」になってきた。

漫画では、腐女子という言葉の意味の拡大も起きている。『海月姫』(2009年)では、主人公の女性キャラクターは、自分を「腐った女の子(ふじょし)」として語るのだが、彼女はクラゲオタクであって、男性同士の恋愛を愛好する女性としては描かれていない。彼女が暮らす男子禁制の下宿に住む女性キャラクターは、それぞれが、何かのオタクとしては提示されているものの、男性同士の恋愛を愛好するという意味での腐女子は登場しない。

漫画に描かれる腐女子は多様化し、物語は、腐女子キャラクターとおたくを含む男性キャラクターとの恋愛が中心でなくなっていく。『海月姫』のように、男性同士の恋愛を愛好する女性ではないキャラクターも、「腐った女の子(ふじょし)」として描かれるようになった。

2008年から2011年にかけての、腐女子が描かれる状況を整理すると、次のようなことがいえる。1) 腐女子という呼称が使用されるようになった。2) 男性キャラクターと腐女子の関係性が、物語の中心から外れていく、3) 上記の2)に伴って、おたく男性のキャラクターと腐女子の良好な関係性は、特に描かれなくなっている。

2002年からの変化を整理したのが、以下の表1である。

表 1. 腐女子の呼称とおたく男性キャラクターの関係

刊行年	単行本タイトル(副題は省略)	腐女子の呼称	おたく男性	おたくでない男性
2002	電腦やおい少女	—	—	○
2002	げんしけん (1)	—	○	—
2004	げんしけん (4)	—	○	—
2006	げんしけん (9)	—	○	—
2006	となりの 801 ちゃん (1)	○	○	—
2007	らっきー腐女子	○	○	○
2008	はっぴー腐女子	○	○	○
2008	にこにこ腐女子	○	○	○
2008	フダンシズム (1)	○	—	○
2009	くされ女子!	○	—	—
2009	海月姫 (1)	○	—	—
2011	げんしけん 二代目の巻 (10)	○	—	—

3. 消費される腐女子キャラクター

「腐女子」という名称で「男同士の恋愛を好む女性」キャラクターが描かれるようになって以降、おたく男性キャラクターと、腐女子キャラクターの良好な関係性を描く漫画作品は増加した。腐女子という言葉に伴っての「男同士の恋愛を好む女性」への注目と、『げんしけん』での「男同士の恋愛を好む女性」キャラクターとおたく男性キャラクターの良好な関係性というモデルの提示と、『となりの 801 ちゃん』での、おたく男性キャラクターの彼女としての腐女子キャラクターの登場は、同時期に起こっている。おたく男性との良好な関係性を描いた作品として本稿で挙げた『げんしけん』最終巻 (9 巻)、『となりの 801 ちゃん』の初巻は、2006 年に発行された。2006 年は、腐女子を一般向けに紹介したルポルタージュ本『オタク女子研究:腐女子思想大系』が刊行された年でもある。腐女子の呼称が普及して以降は、腐女子と呼称されるキャラクターが登場するようになった。2006 年に最終刊を発行した『げんしけん』の続編は、2011 年第一巻目が刊行されているが、続編では「腐女子」「腐男子」といった呼称が用いられている。

腐女子キャラクターを消費されるものとして見た場合、伊藤の議論にあるように、おたく男性と良好な関係性を築く 801 ちゃんのキャラクターは、男性からみて「男性の抑圧の解除」として解釈が可能で、受け入れることができるものである。801 ちゃんの登場以前の『電腦やおい少女』でも、「男

同士の恋愛を好む女性」キャラクターと男性キャラクターの良好な関係性は描かれていたが、男性キャラクターはおたくではなかった。男性キャラクターをおたく男性とした『げんしけん』や『となりの 801 ちゃん』では、続編も作られるヒット作となった。単行本に収録される元になる作品を発表した媒体の、元々の読者数が不明であるので、読者からのキャラクターの受け入れやすさと、ヒット作となったか否かについて、確かなことはいえないが、可能性の一つとして挙げておく。

腐女子キャラクターを、どのようなジェンダーの人たちが消費しているのかもまた、本稿で特定することはできないが、本稿が着目するのは、実際に誰が消費しているのかではなく、おたく男性の消費対象となりうるものとして、「男性同士の恋愛を好む女性」が漫画に描かれるようになったという現象である。

おたくに特徴的なキャラクターの消費は、「データベース消費」のモデルで説明することができる。

「データベース消費」の観点からみると、おたく男性キャラクターと良好な関係性を築く女性キャラクターが、おたくによって消費されるキャラクターであるということは、その女性キャラクターが、何らかの「萌え要素」の組み合わせの結果であるということを示している。本稿が事例とした女性キャラクターの特徴は、「男同士の恋愛を愛好する女性」であるか、「腐女子」の呼称をもつというものだ。「男同士の恋愛を愛好する女性」としての腐女子キャラクターが複数現れているということは、すなわち、「男同士の恋愛を愛好する女性」としての「腐女子」は、おたくの消費の対象となるキャラクターを構成する「萌え要素」の一つとして、「データベース」に登録されていることになる。「データベース」に登録されているということは、漫画のキャラクターとしての腐女子は、「データベース」に登録された「萌え要素」から構成される、おたくによる消費の対象としてのキャラクターであるということだ。このようにして、おたく男性が腐女子キャラクターを消費の対象とする仕組みができあがっている。この仕組みによって構成された関係性は、消費される腐女子キャラクターと消費する男性の非対称性を示している。この関係性とは、おたく男性が消費する側／腐女子キャラクターは消費される側という非対称性そのものだからである。

しかし、非対称性は固定されるものではない。他方では、男性の消費の対象としてばかりではない腐女子キャラクターもまた描かれている。「男同士の恋愛を愛好する女性」としての腐女子を突き詰めれば、「男同士の恋愛を愛好する」ことを強調した腐女子として、腐女子キャラクターが現される。『妄想乙女通信』シリーズや、『くされ女子!』のように、腐女子キャラクターを中心に描き、腐女子キャラクターと、おたくを含む男性キャラクターとの関係性は物語に登場しないエッセイ風の作品では、腐女子キャラクターは、自分の「妄想」や、腐女子同士の交流に終始して、男性キャラクターとの良好な関係性にこだわっていない。これらの作品では、おたく男性との良好な関係性を結ぶ腐女子キャラクターというキャラクター像は、もはや見出すことができない。

消費の観点からみると、どのようなキャラクターにしても、キャラクターである以上、消費の対象であることには変わりはないが、「萌え要素」としての腐女子ではなく、「腐女子であること」とはどのように表現できるのかを追求したような、女性の側に立った腐女子キャラクターが登場したということである。漫画に描かれた腐女子キャラクターは、消費される女性キャラクター／消費する男性という非対称性を構成するのだが、それと同時に、おたく男性キャラクターの彼女としてばかりではない腐女子キャラクターが描かれることで、腐女子キャラクターとおたく男性の位置づけが固定されたものではないことを、腐女子キャラクターの消費者に示している。

位置づけが固定されたものであるかどうかに着目すると、東が示した「データベース消費」では、「データベース」に登録された「萌え要素」と、「データベース」の関係は、固定されて変わらないものなのか、揺らいだり変更されたりするものであるかは明確ではないが、本稿での考察した変化は、その関係が、固定されたものではなく、揺らいだり変更されたりするものであることを示唆している。

おたくの消費の対象として「データベース」に書き込みされたのは、男同士の恋愛を愛好する女性としての「腐女子」である。その意味での「腐女子」が、「データベース」に書き込まれる契機は、『げんしけん』を通じて男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターとおたく男性キャラクターの良好な関係性が描

かれるようになったことである。さらに、おたく男性キャラクターとの間に良好な関係性を結ぶ男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターの呼称が「腐女子」であることは、『となりの801ちゃん』において、おたく男性の彼女としての腐女子が描かれたことに象徴されている。

腐女子が、「データベース」に書き込みされた背景は、男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターだからというだけでは不十分である。なぜならば、『電脳やおい少女』の時点では、男同士の恋愛を愛好する女性というキャラクターは、漫画ではブームというほどの勢いを持たなかったからである。『げんしけん』や『となりの801ちゃん』と、『電脳やおい少女』の違いは、主人公の女性キャラクターと良好な関係性を築く男性キャラクターは、おたくではなかったということだ。それを踏まえると、「データベース」への「腐女子」の書き込みは、段階を踏んでいることが分かる。書き込みの契機は、おたく男性キャラクターと良好な関係性となる女性キャラクターとして、男同士の恋愛を愛好する女性が描かれたことであり、男同士の恋愛を愛好する女性が「萌え要素」として盛んに利用され、腐女子ブームが生じたのは、「腐女子」という呼称が普及するのに伴ったことである。つまり、「萌え要素」としての「腐女子」には、男同士の恋愛を愛好するだけではなく、おたく男性キャラクターと良好な関係を築く女性としての特徴が伴っている。

「萌え要素」としての「腐女子」に、当初とは別の特徴が付加されていくものとすれば、男性キャラクターとの関わりを持たない女性である「腐女子」キャラクターや、「クラゲオタク」の「腐った女の子（ふじょし）」キャラクターの登場によって、「腐女子」という「萌え要素」に対して「男性キャラクターと関わらない」という特徴や、「クラゲオタク」という特徴が書き込まれていくことになる。しかし、おたく男性キャラクターとの良好な関係性が「腐女子」が「データベース」に書き込まれた理由である限り、おたくを含む男性キャラクターと関係性が描かれない「腐女子」は「萌え」ない「腐女子」であり、「萌え」ない「腐女子」は、おたく男性の消費の対象としての「萌え要素」たり得ない。

「腐女子」が、おたくによる消費の対象として「データベース」に書き込まれているという事態が変わらなくとも、「データベース」における「腐女子」の

意味づけは変わる。それは、「データベース」に書き込まれた「腐女子」がもっていた当初の意味を、多様化した腐女子キャラクターが提示した腐女子の特徴が、「上書き」したものとして捉えることができる。「萌え要素」としての「腐女子」は、おたく男性との良好な関係性からはじまったかもしれないが、新たな腐女子キャラクターの特徴が現れることで、常に「上書き」され続け、元の「腐女子」ではなくなっている。

消費するおたく男性と、消費される腐女子キャラクターという構造は変わらなくても、おたくが、腐女子キャラクターを、どのようなものとして消費可能であるのかは、固定されない。それは、おたく男性が消費する「萌え要素」としての「腐女子」から腐女子キャラクターが構成されたとしても、「萌え」ない「腐女子」が、腐女子キャラクターとして現れ、描き続けられることで、「腐女子」は常に「上書き」され続けているからである。「データベース」上の意味が「上書き」され続けるということは、消費されるキャラクターとしての腐女子と消費するおたく男性の関係は、固定されたものではないことを意味している。

Ⅳ. むすびにかえて

本稿は、Ⅰにおいて、女性を主な対象とした「男同士の恋愛」を描いた作品や、男同士の恋愛を描いた作品の愛好者について、ジェンダーやセクシュアリティの観点から研究がなされてきたことを概観した。とりわけ、腐女子という呼称で「男同士の恋愛」を愛好者がおたくと結びつけられたとき、ジェンダー間の非対称性を構成するような議論が提示されていることを指摘した。Ⅱでは、東浩紀による「データベース消費」の概念により、おたく男性によるキャラクターの消費とは、キャラクターそのものではなく、キャラクターを構成する「データベース」を消費していることを説明した。Ⅲでは、男同士の恋愛を愛好する女性が描かれた漫画について、男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターと男性キャラクターの関係性と、男性キャラクターがおたくとして描かれているかどうかに注目して整理した。整理に基づき、男同士の恋愛を愛好する女性キャラクターが、腐女子と呼称されるようになった時期と、腐女子キャラクターとおたく男性キャラクターの良好な

関係性が描かれるようになった時期が一致していることを指摘した。おたく男性による腐女子キャラクターの消費は、「データベース消費」の観点から「男同士の恋愛を愛好する女性としての腐女子」が、おたく男性にとっての「萌え要素」となることで成立したという仕組みを明らかにした。次いで、男同士の恋愛を愛好する女性として徹底して腐女子キャラクターの登場は、腐女子キャラクターとおたく男性の関係性が固定されたものではないことを示していることを明らかにした。

腐女子という呼称は、男同士の恋愛を好む女性に対する幅広い言及を生み出した。それは、本稿で触れたような、漫画のキャラクターや研究、ルポルタージュ風の読み物などとして現れている。とりわけ、池田に見られるように、おたくに関連した議論では、腐女子以前と腐女子以後では、男同士の恋愛を好む女性の位置づけが変化している。本稿では、おたくに関連して、消費するおたく男性と消費される腐女子キャラクターとして、変化の意味を捉えた。この変化は、腐女子と呼ばれる女性ばかりではなく、男同士の恋愛を好む女性についての研究上の位置づけを考える上で、重要な意味をもっていると筆者は考えている。本稿では言及できなかったが、腐女子以前と腐女子以後での男同士の恋愛を好む女性に関する議論の変化を整理し位置づけを探ることを、筆者の今後の課題とする。

女性向けに描かれる男同士の恋愛を扱う作品は、現在のところは無くなる気配はない。それは、おそらく今後も描かれ、読まれていくものだ。女性が女性のために描いたり読んだりすることの意味は、そのときどきで変わっていつているのかも知れない。だからこそ、男同士の恋愛を愛好する女性を、筆者は追っていきたいと考えている。

参考文献

- 東園子、2010、「妄想の共同体：「やおい」コミュニティにおける恋愛コードの機能」、東浩紀・北田暁大編『思想地図Vol.5 特集・社会の批評』、東京都：NHK出版
- 堀あきこ、2009、『欲望のコード：マンガにみるセクシュアリティの男女差』、京都府：臨川書店
- 池田太臣、2012、「オタクならざる「オタク女子」の登場」、馬場伸彦・池田太臣編著『「女子」の時代!』、

- 東京都：青弓社
- 伊藤剛、2007、「801ちゃんのとなりで」、『ユリイカ 6月臨時増刊号総特集腐女子マンガ大系』、第39巻、第7号、東京都：青土社
- 守如子、2010、『女はポルノを読む：女性の性欲とフェミニズム』、東京都：青弓社
- 永久保陽子、2005、『やおい小説論：女性のためのエロス表現』、東京都：専修大学出版局
- 中島梓、1998、『タナトスの子供たち：過剰適応の生態学』、東京都：ちくま書房
- 中森明夫、1989、「僕が『おたく』の名付け親になった事情」、『別冊宝島104 おたくの本』、東京都：J I C C 出版局
- 大崎祐美、2009、『腐女子のことば』、東京都：一迅社
- 榊原志保美、1998、『やおい幻論：[やおい] から見えたもの』、東京都：夏目書房
- Scott, Joan, Wallach, 1999, *Gender and the Politics of History Revised Edition*, New York: Columbia University Press, (= 荻野美穂訳、2004、『[増補新版] ジェンダーと歴史学』、東京都：平凡社)
- 杉浦由美子、2006、『オタク女子研究：腐女子思想大系』、東京都：原書房
- 吉本たいまつ、2007、「男もすなるボーイズラブ」、『ユリイカ 6月臨時増刊号総特集腐女子マンガ大系』、第39巻第7号、東京都：青土社

ジャパン

- 竹内佐千子、2009、『くされ女子！：百合で腐女子なサチコとゆかいな仲間たち』、ブুকマン
- 刻田門大、2008、「彼氏彼女の事情」、たちばなさくや
- 他著、2008、『らっきー腐女子』、ホビージャパン

参考資料

- 東村アキコ、2009、『海月姫』第一巻、講談社
- 木尾士目、2002、『げんしけん』第一巻、講談社
- 木尾士目、2004、『げんしけん』第四巻、講談社
- 木尾士目、2006、『げんしけん』第九巻、講談社
- 木尾士目、2011、『げんしけん：二代目の壺』第一〇巻、講談社
- 小島アジコ、2006、『となりの801ちゃん』、宙出版
- 楠見らんま、2007、「SUPER STRONG GIRL!」、内村かなめ他著、『はっぴー腐女子』、ホビージャパン
- もりしげ、2008、『フダシズム：腐男子主義』第一巻、スクウェア・エニックス
- 乙女☆妄想族編、2008a、『妄想乙女通信』、光文社
- 乙女☆妄想族編、2008b、『妄想乙女通信R』、光文社
- 乙女☆妄想族編、2009、『妄想乙女通信G』、光文社
- 戦国結城、2008、「みっくんとせつちゃんの場合 カコバナ」、幸宮チノ他著、『にこにこ腐女子』、ホビー